はなまき通検定

往来物（おうらいもの）

一般社団法人花巻観光協会

＝ は　じ　め　に ＝

『どなたも　どうか　お入りください。

決して　ご遠慮はありません。』

この往来物（テキスト）は、花巻市民の方々に花巻の歴史・文化・自然・先人などに関する知識を深め、花巻の良さを再認識していただくとともに、市民皆さんで観光客をおもてなしできるようにするために実施する「はなまき通検定」の参考書として作成したものである。

内容は、花巻に関する各分野の専門家に是非に知っておいた方がいいと思われる事柄を拾い集めていただいたものであるが、花巻の全てには、未完成の域を出ていないことを付け加えておく。

そのため、「なん～だ、こんなこと知ってる」から「エッ、これが花巻に？」というようなことがあるかも知れない。また、「なんか足りないのでは？」というところもあると思う。

皆さんに、楽しみながら学習する「楽習」気分で、花巻の知識度を高めていただきたいものである。

そして、気軽にこの検定に参加いただきたい。

平成２６年１２月１日
令和２年７月１６日改訂
令和２年１０月８日改訂
令和２年１２月２日改訂
はなまき通検定「往来物」　発行元／花観堂

『だんなぁ、だんなぁ』　『おおぃ、おおぃ、ここだぞ、早く来ぃ。』

各個人の年表の年齢は、「満年齢」で表しているが、逝去時には満年齢に達していない場合は空欄となっている。

＝ 目　次 ＝

＜キラリと輝く先人達＞

宮沢賢治　・・・・・・・・・・・　１
高村光太郎　・・・・・・・・・・・　７
新渡戸氏と新渡戸稲造・・・・・・・・・　１１
萬鉄五郎　・・・・・・・・・・・　１５
多田等観　・・・・・・・・・・・　２０
谷村貞治　・・・・・・・・・・・　２２
佐藤昌介、島善鄰、淵澤能恵・・・・・　２５

宮沢賢治（みやざわけんじ）

〇子供のころ

賢治は、父政次郎（まさじろう）、母イチの長男として、1896 年（明治 29 年）いまの豊沢町（とよさわちょう）で生まれた。

この年東北地方は冷害と大雨に見舞われ、多くの家や作物が流された。また賢治が生まれてまもなく、沢内村が大地震に襲われ、多くの犠牲者を出した。この時母イチは、赤ん坊の賢治に覆いかぶさって、一生懸命念仏を唱えたという。

父は熱心な仏教信者であった。大沢温泉に名僧といわれる人を呼んで、毎年勉強会を開いた。子供の賢治も真面目に聞き、先生のそばをいつまでも離れなかったといわれている。

さらに、賢治の周りには熱心なクリスチャンが何人かいて、正しく本当のものを求めてやまない空気が満ちていた。

賢治は、鉱物や植物の勉強にも熱中した。様々な色の石や化石を集め、植物の押し葉を作り、箱などに入れて楽しんだ。あまりにも石に熱心だったので、家族から「石コ賢さん」と呼ばれたほどである。

虫にも興味を持った。色々な虫を集め、大切に飼いながらよく調べ、虫が死ぬと丁寧にお墓を作っておがんだりもした。

〇中学校のころ

1909 年（明治 42 年）4 月、賢治は盛岡中学校に入学した。家族から離れての生活が始まった。多くの先生や友達とまじわりながら、ある時は反抗したり、ある時は心の底から感動したりしながら、自由な空気にひたった。

賢治の鉱物好きは、ますます強くなって行く。遠足や散歩の時は、きまって金づちが腰にはさまれていた。盛岡あたりの山や丘から、この金づちを使って石の標本を集めるのである。机の中や押し入れの中まで、いたるところ石であふれていたという。

この頃、賢治の興味に、星が加わった。星座に夢中になり、ある夕方などは、屋根に上ったままいつまでもおりてこなかったという。

子供のころから勉強した仏教を、中学校でもどんどん学んだ。寄宿舎を出ていくつかのお寺に下宿し、お経を読み、仏の教えを一生懸命聞いた。

〇本との出会い

中学校を卒業した賢治は、その後 1 年間家の仕事を手伝っていたが、両親は、賢治には商売は向かないと考え、受験勉強をすすめた。あきらめかけていた進学の夢がかなえられることを賢治はおおいに喜び、さかんに勉強した。

そしてこの夏、賢治の一生を考える時、とても大切な本とめぐり合う。

父が友人からおくられて持っていた妙法蓮華経（みょうほうれんげきょう）の本を読んだ賢治は、感動のあまり体が震えて止まらなかった。これ以後、賢治のかたわらにはいつもこの本が置かれ、毎日心をこめて読んでいく。いままで寂しそうにしていた賢治は見違えるように明るくなって、元気を取り戻した。周りの人々は、みんな驚いた。

〇農林学校のころ

全力を尽くして勉強したかいがあって、1915 年（大正 4 年）、賢治は盛岡高等農林学校（もりおかこうとうのうりんがっこう）に入学した。一番の成績であった。

頭で考えるだけの勉強ではなく、地質や化学の実験に目を光らせながら、生き生きとして励んだ。難しい勉強にも、進んで取り組んだ。

今までにないほど親しい友達もできた。全国から集まっていることも珍しく、楽しかった。みんな文章を書くのが大好きで、『アザリア』という本を作り、お互いに意見を出し合い、励ましあった。

ところが、仲間の一人が学校をやめなければならない事件が起きた。芸術や宗教について心を開いて語り合っていた友人だけに、賢治は強いショックを受けた。友人が自分から去っていくという寂しさばかりではなく、賢治自身、これからどのように生きたらよいか、という大切な問題であった。

○農林学校を卒業してから

賢治が童話「蜘蛛となめくじと狸」や「双子の星」を書き上げたのは、農林学校を卒業した夏である。

「双子の星」は、チュンセとポウセの双子のお星さまの美しい話だ。このお話を、賢治はまず家族に読んで聞かせた。なにしろ初めての童話なので、賢治はうれしくてたまらず、赤黒く日に焼けた顔を輝かせ、目をキラキラさせながら、得意そうであった。

1921 年（大正 10 年）、賢治は突然東京に向かう。自分が信じる宗教で家族みんなを幸せにしたいという願いと、しかしなかなかかなえられないという苦しみを胸にしての上京であった。

東京では印刷関係の仕事をしながら勉強を続け、大変ないきおいで童話を書いた。この時の様子を、

「人間の力には限りがあります。仕事をするのには時間がいります。どうせ、まもなく死ぬのだから、早く書きたいものを書いてしまおうとわたしは思いました。１か月の間に、３千枚も書きました。そしたら、おしまいのころになると、原稿の中から１字１字飛び出してきて、わたしにおじぎするのです。」

と、小学校時代の先生に話している。

東京での７か月間に書いた童話の原稿はいっぱいになった。まもなく、妹トシが病気になったため、賢治は急いで花巻に帰ってくる。原稿をトランクいっぱいに入れ、重たそうにして駅に降りた。

○農学校の先生として

花巻に戻った賢治は、トシの看病や家の手伝いをしながら、次々と童話を書き続けていく。「月夜のでんしんばしら」「鹿踊りのはじまり」「どんぐりと山猫」「注文の多い料理店」、そして「雪渡り」などが生まれた。

しかし、賢治が決まった職業につかないでいることを、父はとても心配していた。健康のためにも何か仕事をした方が良いという考えである。外に出て、もっと明るく生きてほしい、という願いもあったにちがいない。

そんな時、花巻農学校の先生にならないか、という話があった。

そのころの農学校はあまり大きくなく、先生も生徒も多くなかった。しかし蚕や農作物の勉強を教える、花巻地方ではとても大切な学校であった。賢治は、迷うことなく引き受けた。

この学校でひとりの音楽の先生に出会った賢治は、その先生と一緒に音楽の勉強に励んだ。まだ西洋の音楽を聴く人は多くない時代だったが、賢治は次から次へとレコードを注文し、難しい曲でも何回も繰り返し聞いた。ベートーベン、チャイコフスキー、そしてショパンに夢中になった。音の素晴らしさばかりでなく、人間の生き方をも学び取るのであった。

東京のあるレコード会社が、花巻のレコード屋さんではずいぶん売れ行きが多いし、難しい曲ばかり出るので不思議に思って調べたところ、その店からはほとんど賢治が注文し買っているのだと分かり、驚いてしまったという。

「花巻農学校精神歌」ができたのもこの頃である。

日ハ君臨シ　カガヤキハ　　白金ノアメ　ソソギタリ

ではじまるこの曲は、いま花巻に、朝の７時をチャイムで知らせてくれる。

1922 年(大正 11 年)11 月 27 日、かねてから病気で寝ていたトシの容体が急変した。みぞれの降る寒い日であった。医師の手当てのかいもなく、夜の８時半ごろトシの呼吸は止まり、脈も打たなくなった。賢治はおののきながらトシの名を何べんも呼んだが、トシは家族に見守られながら安らかに息を引き取った。

賢治は押し入れの中に頭を入れて激しく激しく泣いた。そして自分の膝の上にトシの頭をやさしく乗せ、いたわるように髪をすいてやった。

トシはどこへ行こうとするのか。この問題を、賢治はこれから胸に抱いて旅をすることになる。

トシの死から半年もの間、賢治は一切詩を書かなかった。今までなかったことである。

それから２年後、賢治は初めての詩集『春と修羅』と、童話集『注文の多い料理店』を出した。トシの死の悲しみを乗り越えての作品であった。

『注文の多い料理店』の広告で、賢治は

「けれども、わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまい、あなたのすきとおったほんとうのたべものになることを、どんなにねがうかわかりません」と書いている。

農学校での賢治は、教室の中での授業ばかりでなく、学校劇の発表にも熱心であった。

劇に出る人物の服装や舞台で使う道具などを生徒たちと一緒に作って、「植物医師」や「ポランの広場」などを発表した。劇が終わると舞台道具を校庭で燃やし、そのまわりをみんな一緒に輪になって囲み、「ゆかい、ゆかい」と踊り続けた。

このように、生徒たちと一緒の毎日はとても楽しそうであったが、しかし賢治には大きな苦しみがあった。

私たちは毎日生きている、あるいは生かされている。でも私たちが生きるためには、どうしても食事しなければならない。魚や肉を食べ、野菜や果物もとらなければ生きていけない。

しかし、私たちの食べるこれらのほとんどは生命を持っている。私たちはその生命を奪っているのだ。そうしなければ生きていけないのが人間なのだろうか。賢治は悩み、苦しんだ。

童話「よだかの星」は、このような悩みの中で書かれた。

○羅須地人協会のころ

1926 年(大正 15 年)３月、賢治は農学校の先生をやめる。４年４か月の生活は実にゆかいだったが、自分はこのままではいけないと思った。

「生徒には農村に帰って立派な農民になれと教えていながら、自分はのんびりとして月給をもらっているのは心苦しい。自分も、口であれこれ言うのではなく、農民と一緒に土地を耕そう」

そう考えた賢治は、下根子・桜の二階建ての家に住みながら、荒れた土地を切り開くことから始めた。顔は真っ黒に焼け、腕は蚊に刺された黒い点がいっぱいだった。疲れ切って引きずる足。靴下が破れ、大きな切り傷もできた。

「最初の日はやっと２坪ばかり。その次の日も２坪とちょっとばかり。なにせ、竹やぶでね。夕方には、腕がジンジン痛む。しかし、今では 10 坪ぐらいは平気ですよ。体も慣れてなんともない」と話す。

ここでの生活は、作物を作ることだけではなかった。

農民はただがむしゃらに働くばかりではだめだ。もっと広く、大きな生き方をしなければならない。

そのためには、音楽や宗教、科学や文学を学ばなければいけない。そして、すばらしい農民芸術を作り出していこう。

賢治の決意は固かった。昼はくたくたになるまで働き、夜は近くの人々を集めて一緒に勉強する毎日であった。毎週火曜日は、農民楽団の練習。賢治はオルガンとセロ。土曜日は子供たちを集めて童話を読んで聞かせた。

ここに集まる人々は、木炭を担いで来たり、餅を持って来たりした。賢治に迷惑をかけまいとしたのである。丸い木の椅子やみかん箱などに腰など掛けて、みんなが持ち寄ったお弁当を食べながら、いつまでも楽しく話し合った。

賢治は人々に、雪道は大変だったでしょう、と言ってりんごやするめをご馳走し、オルガンを弾いて聞かせるのであった。

農民の苦しみを、自分も苦しまなければならないと考えた賢治は、食事も粗末なものしか食べようとしない。

夏は、3 日分くらいのご飯に梅干を入れて井戸につるしておいて食べたり、冬は、すっかり凍って固くなったご飯に塩をかけて食べたりした。

漬物があれば漬物だけ。何もないときは、ご飯にしょうゆをかけてすます。

激しい労働と粗末な食事。賢治の体は弱りに弱って、ついに病床についてしまう。

1931 年(昭和６年)、賢治は東北砕石工場(とうほくさいせきこうじょう)の技師となった。工場で作る肥料を農家に安く回せるし、工場でも注文が少なくて困っているというので、喜んで引き受けた。

秋になって、タイルの見本をトランクに詰めて東京に出た。まだ病気もよく治っていないのに、重いものを持って旅行するのはとても危ないから、と家族は心配だった。

でもどうしても行かなければならない、と言って出かけた。そして、東京の宿で、激しい熱を出してしまったのである。

花巻に戻って来た時は、かなり病気が進んでいた。苦しくないふりをしていたが、家に着くとすぐ病床に伏してしまった。

〇晩年

花巻に戻ってからの２年間は、病気の体を励ましながら詩や童話をたくさん書いた。もうあんまり時間がないというようであった。

「風の又三郎」「銀河鉄道の夜」「セロ弾きのゴーシュ」「グスコーブドリの伝記」が次々に書かれた。

童話を書きながらも、農民の生活を忘れることはなかった。何としてでもいい作物をたくさん取らせたい、そう願いながら肥料の設計をした。

1933 年(昭和８年)９月、花巻地方は豊作に沸いた。心から喜んでお祭りができる、人々はそう思った。祭りの最後の夜、賢治も門のところまで出て、みこしを拝んだ。

家に入った賢治のところに、その日も農家の人がやって来て、長い時間肥料の相談をした。そのためか、賢治はまた熱を出してしまった。

心配のあまり一緒に休むことにした弟の清六(せいろく)に、

「今夜の電灯は暗いなあ。」

と言ったり、

「この原稿はみなお前にやるから、もし小さな本屋からでも、出したいところがあったら発表してもいい。」

と言った。清六は悲しくてたまらなかった。

21日、お昼ごろになって、２階の賢治の部屋からお経を唱える声が聞こえてきた。家族みんなが２階に上がると、賢治は口から血を出し、青ざめていた。それなのに、一生懸命お経を唱えていた。

父は、

「言い残すことはないか。」

と聞いた。賢治は、

「国訳妙法蓮華経を１千部お作りください。その後ろには、『私の生涯の仕事は、この経をあなたのお手元に届け、そして、その中にある仏意にふれて、あなたが無上道に入られますことを。』ということを書いて、知り合いの方々にあげてください。」

と言った。

「お前もたいした偉いものだ。あとは何も言うことはないか。」

と父が聞くと、賢治は

「あとはまた起きて書きます。」

と言った。「また起きて」という言葉は、「また生まれ変わって」という意味なのだと、自然な気持ちで清六は思った。賢治は清六たちの方を向いて、

「おれもとうとう父さんにほめられた。」

と嬉しそうに笑う。

しばらくしてから水を少し飲み、オキシフルを付けた脱脂綿で体をきれいに拭き、その綿をぽろりと落とした時には、もう息を引き取っていた。

１９３３年(昭和８年)９月２１日、午後１時３０分であった。

（花巻市教育委員会「小学生のための宮沢賢治」より抜粋）

○宮沢賢治　年表

西　暦	年齢	生　い　立　ち　と　業　績
1896年 (明治29年)	0	８月27日、岩手県稗貫郡里川口町（今の花巻市豊沢町）に生まれる。
1903年 (明治36年)	7	花巻川口町立花巻川口尋常高等小学校に入学。
1905年 (明治38年)	9	受け持ちの八木先生からお話を聞き、童話・民話の本を読む。
1907年 (明治40年)	10	星を見て星座表を作り、美しい石を集めて標本を作る。 夏休みには、父政次郎が中心で行った仏教の講習会に出る。
1909年 (明治42年)	13	尋常小学校を卒業し、岩手県立盛岡中学校に入学、寄宿舎に入る。鉱石と植物の採集に熱中する。
1910年 (明治43年)	14	６月に植物採集岩手登山隊に加わり、初めて岩手山に登る。岩手山にはその後もたびたび登るようになる。
1911年 (明治44年)	15	短歌を作り始める。
1912年 (明治45年)	16	５月、修学旅行で石巻・松島へ行き、初めて見る海に感動する。
1913年 (大正２年)	17	３月、寄宿舎の生徒みんなと騒いで追い出され、盛岡のお寺へ下宿する。

1914年 (大正３年)	18	３月、盛岡中学校を卒業する。４月より６月まで、蓄膿症手術のため入院。 この秋「妙法蓮華経」を読んで感動したと言われている。
1915年 (大正４年)	19	４月、盛岡高等農林学校農学課第二部(農芸化学科)に入学し、寄宿舎に入る。
1916年 (大正５年)	20	３月、修学旅行で東京・京都・奈良・大阪へ行く。 ４月、特待生となる。
1917年 (大正６年)	21	友人と、同人誌「アザリア」を発行し、歌や散文を発表する。
1918年 (大正７年)	22	３月、盛岡高等農林学校本科を卒業。ひきつづき研究生になり、関豊太郎教授指導の下に稗貫郡の土性調査をする。 ５月、童話「くもとなめくじと狸」「雙子の星」などを書く。 １２月、日本女子大在学中の妹トシが病気入院したので、看病のため母とともに上京。
1919年 (大正８年)	23	２月、病気の良くなった妹とともに帰郷。
1920年 (大正９年)	24	５月、研究科を終えて家に帰り、家業を手伝う。童話「貝の火」を書く。日蓮宗の信仰団体国柱会に入り、父と信仰のことで争う。
1921年 (大正10年)	25	１月、父に黙って上京し、国柱会の手伝いをする一方、小さな謄写版刷りの印刷所のアルバイトをし、原稿を書く。 ９月、妹トシの病気を知らされ帰郷。 12月、岩手県稗貫郡立稗貫農学校（後の花巻農学校）の先生となる。
1922年 (大正11年)	26	11月、妹トシが亡くなり、悲嘆にくれる。
1923年 (大正12年)	27	８月、北海道・樺太へ旅行。
1924年 (大正13年)	28	４月、詩集「春と修羅」を出版。 12月、童話集「注文の多い料理店」を出版。
1926年 (大正15年)	30	３月、農学校を辞職。下根子の別宅へ一人住まい、崖下の荒地を開墾し、農民となる。この家で農学校卒業生や農民たちに農業化学を教え、音楽の合奏を行う。羅須地人協会と名付けた。
1928年 (昭和３年)	32	８月、質素な生活と疲労のため肋膜炎になり、家に戻って療養する。
1931年 (昭和６年)	35	２月、病気が治ったかに見え、東北砕石工場の技師となる。岩手県を始め秋田・宮城・東京などを回り、９月、東京で発熱する。家に帰って病床に就く。 11月３日、「雨ニモマケズ」を書く。
1932年 (昭和７年)	36	３月、『児童文学』に「グスコーブドリの伝記」を発表。
1933年 (昭和８年)	37	９月20日夜、農民から肥料の相談を受けて疲れ、21日午後１時30分、顔や首・胸をオキシフルで拭き清め、亡くなる。

高村光太郎

〇高村光太郎の生涯

1883（明治 16）年、東京市下谷区西町（現在の台東区東上野）で仏師・木彫師高村光雲（たかむらこううん）の長男として出生。２姉４弟２妹があり、弟高村豊周（たかむらとよちか）は重要無形文化財保持者（人間国宝）の鋳金家。

木彫師の長男として当然のこととして少年時代から父に技術を教えられた光太郎は、1898（明治 31）年、東京美術学校（現在の東京芸術大学）彫刻科に入学。木彫を専攻するが、翌年彫刻科の中に塑造科が設けられ、その影響で木彫の写生にも洋風の粘土が使われるようになり、木彫の枠を超えた新しい塑造芸術に開眼する。

この前後より文学にも興味を持ち、回覧雑誌に随想や紀行文などを寄稿、鴎村の俳号で俳句を新聞・雑誌に投稿、与謝野鉄幹の新詩社に加わり、雑誌「明星」に短歌を寄せるなど主要メンバーとなる。

1902（明治 35）年卒業。卒業制作は日蓮上人の姿を写した「獅子吼（ししく）」。

1904（明治 37）年、雑誌「ステュディオ」でロダンの「考える人」の写真を見て激しい衝動を受ける。

1905（明治 38）年洋画科に再入学し、洋画を学ぶかたわら戯曲を自作主演するなど彫刻以外に活動の分野を広げ、芸術全般についての考察を深めようとし、広く世界の芸術理解を目的に欧米留学を決意する。

1906（明治 39）年ニューヨークでアカデミー・オブ・デザイン夜学に通うかたわら、彫刻家ポーグラムの通勤助手となる。

1907（明治 40）年ロンドンに渡り、寸暇を惜しんで美術館・図書館を巡り、バーナート・リーチと親交を結ぶ。この頃東京美術学校の彫刻科教授になっていた父光雲の計らいにより、農商務省海外実業練習生の資格を与えられた。

1908（明治 41）年パリに移り、ロダンを初めとする多数の西欧の彫刻・絵画に直接触れ、更にフランス近代文学にも強く惹かれ、ヴェルレーヌ、ボードレール、ロマン・ロランを熟読する。この頃、これら西欧芸術がもつ人間性と日本古来の偏狭の落差を強く感じ、日本人としての自負は崩れ劣等感にさいなまれる。

1909（明治 42）年、帰国した光太郎を待っていたのは、芸術性の追求はさておいて、根付など商品としての木彫を量産する二代目光雲としての期待であった。この風潮に猛烈に反撥した光太郎は、父を象徴とする職人芸術的美術界に対する挑戦とも云うべき運動を開始する。ロダン、ロートレック、マチス、ゴーギャン、ボードレール、ドビッシー、ロマン・ロランなどを精力的に紹介し、当時洋画界の異端児であった萬鐵五郎とも交わることとなる。

1910（明治 43）年、新芸術の拠点として日本で最初の画廊「琅玕洞（ろうかんどう）」を開く。雑誌「スバル」に評論「緑色の太陽」を発表し、日本における今後の芸術のあり方に一石を投ずる。

1911（明治 44）年「スバル」に発表した「失われたるモナリザ」「根付の国」などの一連の詩群は、「真に詩を書く心を得た」と回想する光太郎の詩人としての出発点となった。

1914（大正 3）年詩集「道程」刊行。これは昭和 17 年芸術院賞を受賞。

1915（大正 4）年～1919（大正 8）年、彫刻に専念し詩作はないが、翌年より再び精力的に詩作を始める。また、翻訳にも注力した。

1924（大正 13）年より数年に亘って作られた猛獣（実在の、或いは空想の）をモチーフにした40～50 篇の詩群は俗に「猛獣篇」と呼ばれ、幾度か出版の予告が出されたが、生前遂に出版されることなく、うち 16 篇のみが昭和 37 年草野心平のガリ切りによる謄写版印刷として出版された。

昭和に入って以降智恵子夫人との闘病生活や生活を支えるための木彫小品などの制作はあるものの、積極的な芸術活動は一時的に途絶える。

1934（昭和 9）年、父光雲 83 歳で逝去。

1942（昭和 17）年、言論統制ますます厳しく、政府主導のもとに戦争肯定戦意高揚の文学が推奨され、日本文学報国会が発足、光太郎は詩部会長に就任する。この時期戦意高揚・文学報国をテーマにした詩作は、戦後光太郎の心を苦しめることとなり、花巻における高村山荘での謂わば蟄居（ちっきょ）ともいえる質素な生活を自分に強いるもとになった。

○智恵子夫人のこと

福島県安達郡油井村の造酒家長沼家の長女として 1886（明治 19）年出生。福島県立高等女学校を経て、日本女子大学家政学科を卒業。テニス・自転車などのスポーツを得意とし、絵画の才能にも優れ、太平洋画会の研究生として勉強のかたわら、日本最初の女流挿絵画家として台頭した。

1911(明治 44)年、女性人権運動家平塚らいてふ女史らによる女性雑誌「青鞜（せいとう）」が発刊され、その創刊号から表紙絵を智恵子が受け持った。新しい女性像を求めて絵画・文学など芸術活動に目ざめた彼女は、大学の先輩を通じて光太郎に紹介され、共に今後の日本の芸術のあり方について認識を共有してゆくことになる。結婚という形式にとらわれず、人間の解放と新しい芸術を目指す二人は、1914（大正 3）年、本郷駒込林町のアトリエで同棲を始めた。しかし経済的困窮の中での人間としての葛藤は、二人の生活にも厳しい影を落とし、芸術上の行きづまりなど、或いは加えて実家長沼家が 1929（昭和 4）年、破産したことなどを契機に、彼女の精神状態は不安定になり、光太郎の必死の支えもむなしく、精神分裂症として自己を失う。1935（昭和 10）年、智恵子は南品川ゼームス坂病院に入院、1938（昭和 13）年 10 月 5 日肺結核で逝去するまでの間、千数百点におよぶ紙絵を作った。これらは戦災による消失を懸念した光太郎により、花巻など三ヶ所に疎開され、その一部を現在花巻高村記念館で見ることができる。智恵子との同棲を二人は「同棲同類」と表現し、形式にとらわれずに人間として苦楽・目標を一にするカップルとして生き、その中で紡ぎだされた智恵子に対する思慕や二人の生き方の希望などを表現した明治 45 年～昭和 16 年の詩 29 篇・短歌 6 首・散文 3 篇は、昭和 16 年「智恵子抄」のタイトルで出版された。なお、光太郎は各々の死後の法的措置を慮（おもんぱか）ったのであろうか、昭和 8 年婚姻届を出している。

○高村光太郎と宮沢賢治

宮沢賢治は大正 13 年詩集「春と修羅」・童話集「注文の多い料理店」を出版した。偶々（たまたま）「春と修羅」を入手した草野心平はこれを非常に高く評価し、同人誌「銅鑼（どら）」に取りあげた。心平から同人に誘われた賢治は加入こそしなかったものの折に触れ詩を寄稿していた。すでに同人であった光太郎は、この同人誌を通じて賢治の詩に触れ、心平同様これを高く評価していた。

大正 15 年 12 月偶々上京中の賢治は、駒込林町の光太郎のアトリエを訪れ、挨拶を交わしたと伝えられる。

賢治没の翌昭和 9 年、草野心平が東京新宿で賢治追悼会を行った。この席上、賢治の弟宮沢清六氏が、自宅に賢治の原稿二千五百枚余があり、兄の遺志をついで出版の希望を披歴した。これに対し光太郎は編集と出版社の紹介を約束し、早速花巻から筆写して送られてくる賢治の原稿を編集し、更に自身で装丁して全 10 巻の宮沢賢治全集が完成した。これが賢治文学が世に出た最初であり、宮沢

家をはじめ花巻の関係者は高村光太郎に非常に恩義を感じ、のち光太郎を花巻に誘う遠因ともなった。

1936（昭和 11）年、現花巻市桜町の羅須地人協会跡地に、賢治文学碑の第一号となった記念碑を建立するに際し、「雨ニモマケズ・・・」の後半の部分が選ばれ、高村光太郎にその揮毫を依頼した。光太郎はこれを快諾、碑が建立されたが、結果的に誤字脱字の存在が判明し、光太郎が花巻に疎開してきた翌昭和 21 年、光太郎自ら碑面に追記し直ちに追刻された経緯がある。

○花巻における光太郎

1945（昭和 20）年４月 13 日、駒込のアトリエ空襲により炎上、前年よりすでに花巻の佐藤隆房氏から花巻への疎開を打診されていた光太郎は、花巻からの再度の誘いを受けて花巻への移住を決意し、５月 15 日に上野を発つ。翌日花巻駅着、宮沢賢治の実家に入り、８月 10 日空襲により宮沢家が焼失するまで寄宿する。のち、佐藤昌氏宅、佐藤隆房氏宅と寄宿先を変えた。

光太郎は戦争中文学報国会活動を通じ戦争遂行に協力し、結果的に光太郎文学の読者に戦争肯定を訴えたことなどの反省から、戦後の日本にあるべき姿の芸術を模索したい希望などから、街中での生活よりも人里離れた場所での質素な自活を望んだ。この心は、光太郎が終戦の詔勅を聞いて作った詩「一億の号泣」に「・・・鋼鉄の武器を失へる時精神の威力おのづから大ならんとす。真と美と到らざるなき我等が未来の文化こそ必ずこの号泣を母胎としてその形相を孕まん。」の言葉に表されている。光太郎のこの意を受けて、太田村山口の地に、営林署の小屋（それ以前は鉱山の小屋）が地元の人々の手で解体移築された。それまで１か月間山口分教場の宿直室に間借りしていた光太郎は、現在「高村山荘」と呼ばれるこの小屋に、11 月 17 日移住した。

間口三間、七坪半の小屋は、杉皮葺き・荒壁・障子一枚の粗末なもので、前の空き地を耕して質素な自炊生活が始まった。人々は世に聞こえた高村先生があのようなと危惧したが、光太郎自身は意に介さず、この生活こそ今までの人生の清算であり、今後の芸術を考える最高の環境としていた。

後にこの小屋は、二重の套屋(とうおく)(うわや)で保護され、当時のままの状態で保存され見学に供されている。

小屋には当初便所がなかったが、訪問者の用に供するため、のちに設置された。光太郎が彫刻刀を使った唯一の機会がこの便所の明り取りのくり抜き「光」の文字となった。

小屋は天井が低く、採光も十分でないため、彫刻の制作には全く不適当で、光太郎はここを離れる 1952（昭和 27）年 10 月までもっぱら詩作と書に専心し、書のいくつかは高村記念館に展示されている。

花巻に移住後も光太郎の智恵子夫人への思慕やみがたく、彼女に捧げた詩群は「智恵子抄その後」として出版されたが、この小屋での生活を夫人に報告する詩「案内」が著名。夫人を偲んで小屋の裏山を散歩した道は現在智恵子展望台として整備されている。

小屋と高村記念館の中間には、光太郎の弟であり人間国宝の鋳金家高村豊周の手になる「雪白く積めり」の原稿用紙をそのまま写した詩碑があり、その下には光太郎の遺髪が納められている。

昭和２７年青森県の委嘱による十和田湖畔記念像制作のため 10 月東京に帰られた光太郎は、翌 28 年完成、除幕、のち、体調を崩し、1956（昭和 31）年４月２日肺結核で逝去された。

○高村光太郎　年表

西　暦	年齢	生い立ちと主な業績
1883 年	0	３月 13 日、東京市下谷区に木彫師高村光雲の長男として誕生。母は金谷氏

(明治 16 年)		わか。
1888 年 (明治 21 年)	5	4 月、練塀小学校入学。彫刻をやることは自然に決まっていた。
1897 年 (明治 30 年)	14	9 月、東京美術学校予科に入学。
1902 年 (明治 35 年)	19	7 月、東京美術学校彫刻科を卒業。研究科に残る。卒業制作「獅子吼」。この頃ロダンの彫刻を初めて知る。
1906 年 (明治 39 年)	23	2 月、渡米。ニューヨークでは彫刻ボーグラムの通勤助手。美術学校の夜学生。
1907 年 (明治 40 年)	24	美術学校の特待生に選ばれ、特別賞受賞。農商務省海外実業練習生の資格を得、6 月ロンドンに渡りバーナード・リーチを知る。
1908 年 (明治 41 年)	25	6 月、パリに渡る。
1909 年 (明治 42 年)	26	3 月帰国を決意、イタリアを旅し 7 月東京に帰る。以後、『スバル』等にさかんに新芸術を紹介、短歌・詩・評論を書く。
1914 年 (大正 3 年)	31	10 月、詩集『道程』刊行。12 月、結婚披露。智恵子と 2 人の生活がはじまる。
1926 年 (大正 15 年)	42	宮沢賢治がアトリエを訪問したと伝えられる。
1934 年 (昭和 9 年)	51	智恵子の精神分裂症悪化。父光雲没す。
1936 年 (昭和 11 年)	53	宮沢賢治碑のために「野原ノ松ノ林ノ……」詩揮毫。
1938 年 (昭和 13 年)	55	智恵子がゼームス坂病院で没す。
1945 年 (昭和 20 年)	62	4 月 13 日夜、空襲によりアトリエ炎上。5 月に花巻町の宮沢清六方に疎開。肺炎臥床。8 月宮沢家戦災、終戦。10 月、太田村山口の小屋に移り、農耕自炊の生活に入る。
1952 年 (昭和 27 年)	69	十和田国立公園功労者記念碑の彫像制作を決意、帰京。中野区のアトリエで制作。
1953 年 (昭和 28 年)	70	6 月、裸婦像原型完成。10 月湖畔休屋で除幕される。11 月来花。小屋に行き志戸平などに滞在。
1955 年 (昭和 30 年	72	4 月、山王病院に入院。
1956 年 (昭和 31 年)	73	4 月 2 日早暁、その生涯を終る。

新渡戸氏と新渡戸稲造

〇五千円札に登場した新渡戸稲造

昭和 59 年 11 月 1 日に新渡戸稲造を肖像画に入れた五千円札が登場。平成 16 年、樋口一葉に替るまで 20 年間発行された。この肖像は養女ことの結婚式の時のもので、稲造 56 歳の写真である。新札の札番号 A000001A は大蔵省に残り、A000002A が稲造の出身地盛岡市に、A000001B が十和田市立新渡戸記念館に贈られた。当時は稲造と花巻の関係が知られておらず、花巻新渡戸記念館もなかったため、花巻市ではあまり話題にならなかった。

〇新渡戸氏の歴史と花巻

新渡戸氏の祖先は、桓武天皇までさかのぼる。桓武天皇第五皇子葛原親王に始まり、千葉城主、栃木の新渡戸城主、仙台周辺の高原城主などもしている。

胆沢の西根城主であった 31 代目に当たる頼長の時代に西根城が落城、母子は和賀仙人に逃れて窮地を脱した。子の胤重（32 代）が成人して和賀氏に仕え、江釣子に 7 千刈※を賜った後、浪人して花巻に入る。（※刈＝田の面積の単位。稲束 1 つが収穫できる面積。）

花巻での始まりは胤重の子、33 代春治が安野に落ち着き、時の盛岡藩主南部信直公の招きにより南部の家臣として仕えた時である。33 代春治から 40 代維民（稲造の曽祖父）まで、8 代 228 年間に渡りこの安野に居住し、新田開発などに貢献する。

維民（春治の子常綱から数えて 7 代目）が花巻城縮小に反対したため、花巻系新渡戸本家は北郡川内村（下北半島、現在のむつ市川内町）に流されることとなる。新渡戸家の人々はこの地でも開拓を行い、新田で稲が取れたちょうどそのころ生まれたことから「稲」の字を与えられたのが幼名稲之助、後の稲造である。稲造は 11 代目に当たる。

稲造の人格形成に大きな影響を与えたと言われるのは祖父・傳、父・十次郎、母・せき（勢喜）、そして叔父で養父でもあった太田時敏（十次郎の弟）の 4 人と言われている。

〇新渡戸一族の地域開発

新渡戸氏の地域開発の歴史は 1677 年花巻新渡戸本家 3 代義紹の高松村の開田に始まり、1800 年代には本家分家の別なく取り組み、和賀郡藤根村、同江釣子村、盛岡方面や花巻の宮野目村、湯本村などを開田している。

現在の花巻新渡戸記念館周辺も当時は小さなため池が散在していた地域で、現在ここにある田地の多くは花巻新渡戸第 3 分家、第 4 分家が開田したものである。

また、和賀郡沢内村に至る中山街道の開設（1779）には、花巻第 4 分家新渡戸要作が関係し、その後の改修にも太田時敏（当時稗貫和賀郡長）や第 4 分家で初代花巻町長の新渡戸米八が関わっている。

維民が下北半島の川内村に流されると、これを機に 8 代傳によって三本木原開拓が行われる。十和田湖から稲生川が通り、9 代十次郎の設計によって人口 6 万 3 千に及ぶ現在の十和田市の基が作られた。

〇新渡戸稲造

文久 2 年（1862）、十次郎の三男として盛岡に生まれた稲造（幼名稲之助）は、5 歳で父を亡くし、母せきのもとで育てられる。祖父傳は稲造を可愛がり、「稲造は正しく育てれば将来国の役に立つ人物となるが、間違えば悪党になる」と稲造の人物を見抜いていたという。

稲造９歳の時上京、叔父である太田時敏の養子となる。時敏は祖父傳の四男で、花巻の太田家の養子として入籍していた。時敏は稲造に英語を習わせるなど外国へ目を向けるきっかけを作った人物で、後に稲造は著書「武士道」を時敏に捧げている。

翌年私立英学校で英語を学ぶ。上級には同郷の佐藤昌介（しょうすけ）（別項参照）がいた。昌介とはこの後生涯を通じて親交を交わし、多大な援助を受けることになる。

その後 13 歳で東京英語学校に入学、15 歳で開拓使札幌農学校の第二期生として入学。ここでも第一期生に佐藤昌介がいて何かと教えを受ける。

明治 16 年、21 歳で東京大学入学。面接に当たって「願はくは我太平洋の橋とならん」との言葉を残す。しかし授業が物足りず、翌年アメリカに留学。時敏や兄の七郎から金銭的支援を受けての私費留学であった。

アメリカではアレゲニー大学に入学したが、同じくアメリカに留学していた佐藤昌介の指導でジョンズ・ホプキンス大学に転校。経済学、史学、文学などを学んだ。

明治 20 年、在米中に昌介の特別なはからいで札幌農学校(現在の北海道大学)助教となり、3 年のドイツ留学を命じられる。官費で留学できることになり、金銭的な心配がなくなる。

このドイツ留学で、「日本には道徳を教える宗教教育がないのか」と尋ねられたことが、後の名著「武士道」執筆のきっかけとなる。

明治 22 年、ドイツ留学中に長兄七郎が死去。新渡戸姓に復帰する。

明治 24 年、メリー・エルキントンと結婚、帰国し札幌農学校教授となる。

メリーは稲造より 5 歳年上で、日本では通称新渡戸萬里子（戸籍は萬里）。地元の名家の出身で、敬虔なクエーカー教徒であった。稲造がジョンズ・ホプキンス大学の学生だった頃に稲造の演説を聞いてその考えに傾倒し、エルキントン家の反対を押し切って結婚した。「武士道」の執筆はメリーが質問し稲造が答える形で執筆されたと言われる。また、稲造が第一高等学校校長になると学生のために自宅を開放したり、自分への遺産で貧しい人たちのために札幌の遠友夜学校を創設、稲造の没後は自ら校長となるなど、生涯を通じて稲造を支えた。

明治 30 年、病気のため札幌農学校を退職。伊香保での静養のかたわら、「農業本論」「農業発達史」を執筆、出版する。「武士道」が書き始められたのもこの頃で、明治 33 年（1900）にアメリカで出版され、ベストセラーとなった。

明治 34 年、水沢出身で当時台湾総督府の民生局長をしていた後藤新平に技師として招かれ、のちに台湾総督府糖務局長となっている。稲造が台湾にいたのは 3 年であったが、稲造が提出した「糖業改良意見書」により精糖の生産量は急速に増加。明治 34 年に 5800斤（きん）（斤＝600g）だった生産量が、稲造晩年の昭和 7 年には 16 億 5000 万斤となり、台湾の重要な生産品の首位になる基を作った。

これ以後も第一高等学校校長、東京帝国大学法科大学教授、東京女子大初代学長などを歴任。また第一回日米交換教授として渡米し、1 年間で 164 回もの英語による講演を行っている。

そして大正 9 年、58 歳で国際連盟初代事務次長（5 人のうちの 1 人）となる。次長の国際的地位は日本の総理より上だったと言われるが、この時稲造の担ぎ出しに最も熱心だったのは後藤新平だった。事務総長のドラモンドは演説が苦手で、講演があると 10 回に 7 回は稲造を派遣したという。稲造は演説がうまいだけでなく、深い感動を与えたからだといわれる。就任期間 7 年間の中で難しい国際紛争も処理し、そのめざましい活躍から「ジュネーブの星」と呼ばれた。

ジュネーブでの最大の功績の 1 つに、稲造が提案して作られた国際知的協力委員会（のちのユネス

コ）がある。稲造は幹事長として活躍したが、議長は 20 世紀最大の哲学者といわれたベルグソン、委員会にはアインシュタインやキュリー夫人もいた。

この頃アメリカに日本人移民の排斥運動が起こり、大正 13 年には「排日移民法」が作られている。日本とアメリカの間が険悪になる中で昭和 4 年、67 歳で太平洋問題調査会理事長になり、京都で行われた太平洋問題調査会世界会議の議長を務めた。

日本とアメリカの和平を願い奔走する稲造の思いもむなしく、稲造は軍部や右翼から監視されるようになり、ついには国賊・非国民と見なされるようになる。さらに昭和８年には日本が国際連盟を脱退。

昭和 7 年、松山市で軍閥批判をしたため命を狙われ、昭和天皇の命を受けて日本を去りアメリカに向かう。

翌昭和 8 年に帰国し昭和天皇に拝謁。その後再び太平洋会議出席のため渡米する。しかし会議終了後、体調を崩し入院。10 月 16 日(日本時間)、カナダのビクトリア市ジュビリー病院で亡くなった。71 歳であった。

11 月 18 日、東京青山での葬儀では、佐藤昌介が葬儀委員長を務めた。

妻メリーは、昭和 13 年、軽井沢で亡くなっている。

○著書「武士道」（原題「BUSHIDO：The soul of Japan(日本の魂)」）

日本では道徳を教える宗教教育はないのか、と聞かれ答えに窮した稲造が、のちに日本の道徳が武士道の中に生きていることに思い至る。これを示すため英文で書かれたのが「武士道」で、明治 33 年（1900）にアメリカで出版され、同年日本でも出版された。のちにドイツ語、ポーランド語、ノルウェー語、フランス語、ロシア語、中国語などにも訳されて広く海外で読まれ、稲造自身「BUSHIDO のニトベ」と呼ばれるようになった。当時日露戦争の最中で、この本を読んだアメリカ大統領ルーズベルトは深い感銘を受け、日本側に立って講和の仲介者となることを決断し尽力した。

この本に書かれた「武士道」は、序文から伺われるように花巻新渡戸本家の祖父傳と、稲造の養父であった叔父太田時敏などから学んだものである。

「過去を敬うことならびに　武士の徳行を慕うことを私に教えたる　我が愛する叔父太田時敏にこの小著を捧ぐ」(献辞部分より)

○花巻新渡戸記念館

花巻市安野にある花巻新渡戸記念館は、新渡戸家の屋敷があった場所に平成 3 年に建設されたもので、新渡戸氏の功績やゆかりのあった花巻の先人を紹介している。

この場所は、新渡戸氏 33 代春治が 1598 年に南部氏の招きで安野(やすの)村（現在の花巻市高松）に住むことになった時に居を定めた場所で、春治の妻の父・小原藤四郎の屋敷であった。この場所を「藤四郎屋敷」と言ったり、記念館付近を「旦那の前」（藤四郎屋敷の前）というのはそのためである。今もこの敷地の西側に春治の墓といわれる石がある。東側には稲造と深い親交があった佐藤昌介を称える碑がある。また藤四郎屋敷の居久根林(いぐねばやし)には氏神の安野稲荷神社があり、これは花巻新渡戸家 2 代貞紹(さだあき)が、夢枕に現れた志和稲荷大明神の霊を迎えたものと言われる。

記念館では、盛岡藩士としての新渡戸家の活躍の足跡を、武将・兵学者としての側面や、新田開発に情熱を傾けた業績などを幅広く展示すると共に、新渡戸稲造の才能と人格形成に大きく寄与した花巻時代の新渡戸氏について分かりやすく展示している。

展示物は先祖から信仰してきた観音堂や稲荷神社、開田用具などのほか、稲造と関わりの深い佐藤昌介、島善鄰なども紹介されている。

○新渡戸稲造　年表

西　暦	年齢	稲　造　の　生　い　立　ち　と　主　な　業　績
1862 年 (文久 2 年)	0	9 月 1 日、盛岡藩勘定奉行　新渡戸十次郎の三男として盛岡に生まれる。 幼名稲之助。
1867 年 (慶応 3 年)	5	父の死にあい、母せきのもとで育つ。
1871 年 (明治 4 年)	9	上京して叔父太田時敏の養子となり、太田稲造と改める。
1872 年 (明治 5 年)	10	私立英学校、その後藩校共慣義塾で英語を学ぶ。上級に同郷の佐藤昌介。
1875 年 (明治 8 年)	13	東京英語学校に入学。
1877 年 (明治 10 年)	15	開拓使札幌農学校第二期生として入学。第一期に佐藤昌介。
1880 年 (明治 13 年)	18	母せき死去。
1883 年 (明治 16 年)	21	東京大学入学。面接で「願はくは我太平洋の橋とならん」のことばを残す。
1884 年 (明治 17 年)	22	アメリカへ私費留学。アレゲニー大学入学後、佐藤昌介の指導があってジョンズ・ホプキンス大学に転校。
1887 年 (明治 20 年)	25	在学中に昌介の援助で札幌農学校助教となり、ドイツ留学を命ぜられる。
1889 年 (明治 22 年)	27	長兄七郎の死去により新渡戸姓に戻る。
1891 年 (明治 24 年)	29	メリー・エルキントンと結婚。 帰国し、札幌農学校教授となる。
1897 年 (明治 30 年)	35	病気のため札幌農学校退職。
1898 年 (明治 31 年)	36	伊香保で静養中に「農業本論」「農業発達史」を執筆、出版。 渡米し、療養生活のかたわら「武士道」の執筆を始める。
1899 年 (明治 32 年)	37	佐藤昌介らと共に日本最初の農学博士となる。
1900 年 (明治 33 年)	38	アメリカで「武士道」出版。
1901 年 (明治 34 年)	39	後藤新平に台湾総督府技師として招かれる。翌年台湾総督府糖務局長となる。 新設の京都帝国大学法科大学教授を兼任。
1906 年 (明治 39 年)	44	法学博士となる。 京都帝国大学を辞め、第一高等学校校長となる。

1909 年 (明治 42 年)	47	東京帝国大学法科大学教授を兼任。
1911 年 (明治 44 年)	49	第一回日米交換教授として渡米。
1913 年 (大正 2 年)	51	第一高等学校退任。
1918 年 (大正 7 年)	56	東京女子大初代学長となる。
1920 年 (大正 9 年)	58	国際連盟事務次長となる。
1926 年 (大正 15 年)	64	国際知的協力委員会を創設、国連事務次長を退任。 貴族院議員に勅選※される。
1929 年 (昭和 4 年)	67	太平洋問題調査会理事長、太平洋会議議長となる。
1932 年 (昭和 7 年)	70	松山市で軍閥批判。命を狙われ、昭和天皇の命を受けて渡米。
1933 年 (昭和 8 年)	71	帰国し昭和天皇に拝謁。 太平洋会議出席のため再び渡米。会議後体調を崩して入院し、日本時間 10 月 16 日、カナダのビクトリア市ジュビリー病院で死去。 11 月 18 日東京青山で葬儀。葬儀委員長は佐藤昌介。

※勅選議員：旧憲法下の貴族院の構成議員。満 30 歳以上の男子で、国家に勲功があり学識のある人物で特に勅任されたもの。任期は終身。

キラリと輝く先人達

萬(よろずてつごろう) 鉄五郎

○少年時代

1885(明治 18)年 11 月 17 日、花巻市東和町土沢に生まれる。
萬家は屋号「八丁」といい土沢で回送問屋を営む大地主であった。
幼少の鉄五郎は絵を好み、武者絵などに見入り、めったに戸外では遊ばない内気なおとなしい子供であったと伝えられる。

萬本家「八丁」の中庭。自転車を持つのは従弟の昌一郎(明治 34 年頃)

○水彩画との出会い

水彩画家・大下藤次郎(おおしたとうじろう)による水彩画の指導書『水彩画の栞(しおり)』が当時大ベストセラーとなり、水彩画ブームを巻き起こした。
巻末に、大下のもとに自作を送れば、指導、助言の労をとることが記述されており、全国の絵画少年から作品が送られた。
鉄五郎もその中の一人であった。

大下藤次郎著「水彩画之栞」
＜新声社 1901(明治 34)年 6 月初版＞

《はっきりは覚えてないが十七位の時と思う。或る日新聞に『水彩画の

栞』という本の広告があったので早速買って読んでみた。何んだかその時非常に清新とでもいう様なそそられる様な感じを受けた。そして自分にも直ぐ水彩画が描ける様な気持ちになってその時までやって居た日本画が急につまらなく思われる様になったと思う。指定された道具を買って幾枚かの静物を作った。風景も一二枚かいた筈だ。自分では非常によく出来た様な感じがした。》（『水彩画と自分』「みずゑ」大正 12 年 10 月号）

○東京美術学校時代

1907(明治 40)年、東京美術学校西洋画科に入学。
試験合格者 28 人中、首位の成績であった。
在学中、級長を務める真面目な反面、奇行も多く伝えられる。
当時の美術学校では、教授を勤めていた黒田清輝に代表される、外光派表現が主流であったが、萬は徐々にヨーロッパからもたらされた新しい表現へと傾倒をみせる。

東京美術学校の同級生たちと
（萬は前列左から3人目）

《さかのぼって考えるのに面白かったのは、美術学校の五年間であった。この五年間だけがぽっかり陽があたっているという様な感じである。》（『私の履歴書』「中央美術」大正 14 年 11 月号）

『裸体美人』〔重要文化財〕

東京美術学校卒業制作。卒業制作の評点は 72 点で、本科卒業生 19 名中 16 番だった。

《かなり長くかかって描いた百号の卒業制作……これはゴッホやマチスの感化のあるもので半裸の女が赤い布を巻いて鮮緑の草原に寝ころんでヘイゲイしている図》（『私の履歴書』「中央美術」大正 14 年 11 月号）

○美術学校卒業後

1912(明治 45･大正元)年、美術学校を卒業した萬は、フォーヴィスム（野獣派）や表現主義など新しい表現を積極的に試みる。また、同年 9 月に結成されたフュウザン会に参加。同会は、斎藤与里、岸田劉生、高村光太郎らが発起人となり作られた美術家集団。2 回の展覧会を開いたのみで翌年 5 月解散した。活動期間は短いが、日本で初めての表現主義的な美術運動として、先駆的な意義を持つ。参加者は他に萬鉄五郎、木村荘八、バーナード・リーチなど。若い芸術家 30 人余が参加し、ゴッホ、ゴーギャン、セザンヌ、マチスなど、後期印象派やフォービズムの影響が強くみられる。

第1回フュウザン会
展目録

○土沢時代

1914(大正 3)年 9 月、生活と制作上の理由から、家族と共に郷里土沢に帰る。
一年半の土沢での滞在の間、萬は本家「八丁」と街道を挟んで筋向いにあった。
倉庫を改造し、父の家族とは別に住む。ここに隣接したモダンな木造西洋館にアトリエを構える一方、電灯会社の代理店も営むが、店はほとんどよ志夫人にまかせ制作に専念する。

萬の土沢のアトリエ
（写真は後に郵便局としていた頃のもの）

《この時は随分勉強した。何も見も聞きもしない。二科会など始まった様であったがそんなものも見たいとも思わなかった。秋から冬、春から夏という風にどんどん描いたものである。》（萬鉄五郎『私の履歴書』「中央美術」大正 14 年 11 月号）

この頃の作品は、モノクロ調の抑えた色彩、形態の単純化が進む郷里の風土を盛り込んだ独特なキュビスム（立体派）的傾向が表れる。

○東京時代

当初から、郷里での制作期間を１年間としていた萬は、1916(大正５)年１月家族を伴い再び上京。土沢で描きためた作品を次々と発表する。

『もたれて立つ人』

女性像が立体的に表現される。日本におけるキュビスムの先駆的作品。

《一体吾々がモデルを見る時に興味を曳く点は多々ある。その中で（人が）体をささえて居ると言うことに対して特別にその感じた興味を強く専らに描出しようと思った。そしてそう云う場合にそれを全く客観を離れて表現するのが良いと思った。そして色彩も画面を整頓する上に便宜として自分の趣味から選んだ色を塗った》（「作品につきて」『新美術』１巻第７号　大正６年10月）

睡眠不足と過労が重なり、夏頃から体調を崩す。次第に神経衰弱気味となり、作品の制作ができなくなる。また、肺結核に罹患していることも判明する。

○茅ヶ崎時代

1919(大正８)年春、神経衰弱と結核に冒された萬は、病気療養のため神奈川県茅ヶ崎へ移り住む。

約一年間の療養生活で健康を取り戻すと、洋画に東洋の伝統的絵画である文人画（南画）を取り入れた新しい表現を模索していく。また、しばらく制作を止めていた水彩画・木版画の作品も積極的に手がける。

また美術団体「春陽会」や「円鳥会」の結成にも関わるなどの活動も行う。

《人間の生命が爆発してすきまのない表現を要求する時必ずしも材料を考える要はない。手近にあるどんな材料でもよい筈だ。水絵具でも木炭でも又は万年筆でも墨でもなんでもよいと思う。只何を持ってでも爆発させさえすればよい。

生命が涸渇して爆発しなくなると材料論や技巧論の方法問題にとらわれやすくなる。これは危険な事だ。永久に爆発する人間にとっては方法問題や材料論などは無価値になってくる。この頃よく絵具の研究や技術問題に没頭する人を見るがつまらない事だと思う。芸術は刹那的に爆発する時に尊いのだ。》(萬鉄五郎『水彩画と自分』「みずゑ」大正十二年十月号）

1926(大正 15)年 12 月、前年暮れから病床にあった長女・登美が結核のため他界する(享年 16)。萬は非常に落胆し、このころから精神的にもかなり疲労していったようである。翌 1927(昭和 2)年２月には風邪から肺炎を病み、床につく。４月末には結核性気管支カタルから肺炎を併発し５月１日、午前 10 時 30 分、茅ヶ崎の自室で死去する。享年 41。

アトリエには描きかけの『宝珠をもつ人』が残されていた。生前、萬は「僕の絵はきっと死んだ後で理解されるであろう」と語っていたという。

○萬鉄五郎作品

『裸体美人』
油彩･画布
1912（明治 45）年
162.0×97.0cm
東京国立近代美術館蔵
〔重要文化財〕

『太陽と道』
油彩･板　1912 年頃
24.0×33.0cm
萬鉄五郎記念美術館蔵

『軽業師』
油彩･板　1912 年頃
24.0×33.0cm

左／『目のない自画像』
油彩･画布　1915(大正 4)年
45.8×33.5cm　岩手県立美術館蔵

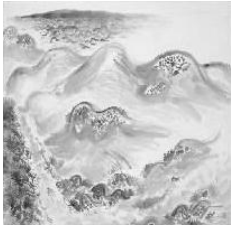
右／『自画像』
油彩･画布　1915(大正 4)年
45.6×33.5cm　岩手県立美術館蔵

自画像と故郷の風景が、郷里土沢での制作テーマ。特にも自画像は一作ごとに形態の解体がすすみ、この作品に至っては内面に潜む形、内なる「顔」を描き出したと見ることもできる。

『丘のみち』
油彩･画布　1917(大正 6）年頃　162.5×112.5cm
萬鉄五郎記念美術館蔵

美術館の建つ「舘山」がモデルとされる。赤い道と緑の土手が幾何学的に単純化され、光による明暗も極力排除されている。ぐねぐねと動いているかのような画面は「内臓模型のよう」と評された。

『もたれて立つ人』
油彩･画布
1917(大正 6）年頃
162.5×112.5cm
東京国立近代美術館蔵



『砂丘』
紙本墨画
1925(大正　14)年頃
66.5×68.0cm
萬鉄五郎記念美術館蔵

『秋景農夫図』
紙本墨画
1922(大正　11)年頃
76.0×63.7cm
萬鉄五郎記念美術館蔵

『宝珠をもつ人』
油彩・画布
1927（昭和 2)年
岩手県立美術館蔵

○萬鉄五郎　年表

西　暦	年齢	生　い　立　ち　と　業　績

1885 年 (明治 18 年)	0	11 月 17 日、花巻市東和町土沢(当時、東和賀郡十二箇村)に父八十次郎(のち勝衛と改名)、母ナカの長男として生まれる。九人兄弟の長男だった。
1892 年 (明治 25 年)	7	土沢尋常小学校に入学。このころから絵に関心を持ち始め、食事中も箸で卓上に動物などを描いては、祖父や父にしかられていた。
1896 年 (明治 29 年)	11	土沢尋常小学校を卒業。土沢高等学校に入学する。「和賀郡小学校連合学芸展覧会」に山水画を出品、郡役所買い上げとなる。
1900 年 (明治 33 年)	15	土沢高等小学校を首席で卒業。祖父長次郎の意志により中学校への進学を断念する。
1901 年 (明治 34 年)	16	このころ、大下藤次郎著『水彩画之栞』を購読し水彩画を始める。大下のもとに作品を送り指導を受ける。
1902 年 (明治 35 年)	17	祖父長次郎(享年 62)死去。鉄五郎は、いとこの昌一郎とともに再び進学への志をもちはじめる。
1903 年 (明治 36 年)	18	3 月末、鉄五郎が上京し、4 月に昌一郎も上京。神田中学校、私立中学郁文館、私立早稲田中学校 3 年に編入学。校内の絵画同好会に加入し、写生会や展示会をおこなっていた。
1904 年 (明治 37 年)	19	伯母タダの勧めで、両忘会の禅道場両忘庵に昌一郎とともに参禅し、鉄五郎は『雲樵居士』の道号を授けられる。
1905 年 (明治 38 年)	20	このころから白馬会第二洋画研究所(通称菊坂研究所)に通いはじめ、長原孝太郎、小林鍾吉らの指導でデッサンを勉強する。
1906 年 (明治 39 年)	21	私立早稲田中学校を卒業。5 月、宗活禅師に従って両忘庵の人たちとともに渡米する。鉄五郎の目的はアメリカでの美術学校入学にあったようであるが、学費のあてがなく滞米留学をあきらめ、この年の暮れ、昌一郎より先に帰国する。
1907 年 (明治 40 年)	22	東京美術学校西洋画科に入学する。
1909 年 (明治 42 年)	24	浜田よ志と結婚する。浜田家は、根津にあって琴の桐材などの取扱いを家業としていた。
1910 年 (明治 43 年)	25	長女フミ(後に登美と改名)生まれる。5 月、白馬会第 13 回展に出品。
1912 年 (明治 45 年)	27	東京美術学校西洋画科を卒業する。卒業制作は『裸体美人』。 5 月、フュウザン会の結成に参加する。10 月、第 1 回フュウザン会展に 7 点出品。このころ生活費を得るため、郷里から木炭を取り寄せて販売したり、浅草の活動写真の看板を描く。
1913 年 (大正 2 年)	28	3 月、第 2 回フュウザン会展に 5 点出品。
1914 年 (大正 3 年)	29	長男博輔、生まれる。9 月、家族をともない郷里土沢に帰り、萬家本家の向かいに電灯会社の代理店を営む。
1916 年 (大正 5 年)	31	家族とともに再び上京する。
1917 年	32	第 4 回二科展に上京後に描いた『もたれて立つ人』など 2 点を出品。次女

(大正６年)		馨子生まれる。
1919 年 (大正８年)	34	不規則な生活や睡眠不足から神経衰弱症にかかり、神奈川県茅ヶ崎市に居住していた弟冨次郎、泰一のもとに転地療養。９月、家族とともに茅ヶ崎に居住する。同月第６回二科展に４点出品。
1920 年 (大正９年)	35	このころから、文人画(南画)に再び興味を持つ。
1921 年 (大正 10 年)	36	第 3 回帝展に『水浴する三人の女』を搬入するが落選。この作品は、その後萬自身によって切り刻まれた。構図中の三人の裸婦のうち、一つは後の作品『宙腰の人』、他の一つは『雲と裸婦』のモチーフとなっている。
1922 年 (大正 11 年)	37	春陽会が設立され、客員として参加。この年、南画についての研究を発表。このころ、文人画を多く制作する。
1923 年 (大正 12 年)	38	円鳥会を組織する。三女多津子(たつこ)生まれる。５月、第 1 回春陽会展に出品。円鳥会を結成。この頃から水彩画を多く描く。
1926 年 (大正 15 年)	41	長女登美が死去する(享年 16)。
1927 年 (昭和２年)		１月末より健康がすぐれず、２月に風邪から肺炎を病み、床につく。４月、第５回春陽会展に出品。生前最後の発表となる。５月１日、午前 10 時 30 分、茅ヶ崎の自室で死去する。享年 42 歳。

キラリと輝く先人達

多田等観(ただとうかん)

〇多田等観の生涯（明治～昭和時代）

多田等観（1890～1967）は、秋田市土崎の西船寺(さいせんじ)に生まれた。秋田中学校卒業後、京都西本願寺に入り、そこでダライ・ラマ 13 世の使者として来日していたチベット僧達の世話役になった。彼らの帰国に際しインドまで同行し、その後単独でチベット入りした。

チベットでは、ダライ・ラマ 13 世の庇護のもと約 10 年にわたってチベット仏教の修行をし、外国人としては初めて大僧正の位に任ぜられた。そして、彼の帰国にあたり、ダライ・ラマ 13 世からチベット仏教に関する秘宝・秘仏・経典等を贈られた。

帰国後には、東北大学、東京大学、慶応義塾大学等の講師を歴任し、チベット学や仏教学の講義をしている。

1945(昭和 20)年、チベット関係資料を戦禍から守るため、実弟(光徳寺住職の鎌倉義蔵(かまくらぎぞう))の住む花巻に疎開し、円万寺観音山で独居をしている。

〇釈迦牟尼世尊絵伝(しゃかむにせそんえでん)

多田等観が帰国に際してダライ・ラマ 13 世に下賜を願い出て叶わなかったものである。しかし、ダライ・ラマ 13 世の遺言により、13 世の死後多田等観に贈られた。

ポタラ宮殿に描かれた壁画の原画と伝えられているものである。釈尊の生涯のエピソードを、チベット仏教史上最も著名な学僧であるターラナータの著作に忠実に依って、125 話を通して描かれている。

○多田等観　年表

西　暦	年齢	生　い　立　ち　と　業　績
1890 年 (明治 23 年)	0	7月1日、秋田県土崎港旭町琴平の西船寺 14 世義観(ぎかん)の三男として誕生。
1910 年 (明治 43 年)	20	秋田中学校卒業、本山の西本願寺に入山。 門主大谷光瑞(おおたにこうずい)の命を受け、チベットのダライ・ラマ 13 世の使者ツァワ・ティトゥル師の世話役となり、チベット語を会得。
1912 年 (明治 45 年)	22	ツァワ・ティトゥル師一行の帰国に同行してインドに渡る。 インドに逗留中のダライ・ラマ 13 世に謁見、トゥプテン･ゲンツェンの法号を賜り、入国の許可を受ける。
1913 年 (大正 2 年)	23	ヒマラヤを越えて単身チベットに入る。 ダライ・ラマ 13 世の特命でセラ学僧院に入る。帰国まで 10 年間あらゆる修行とチベット仏教の研究を行うとともに、文化面の事業に参画する。
1922 年 (大正 11 年)	32	ラマ教の最高学位「ゲシェ(大僧正)」に任ぜられる。
1923 年 (大正 12 年)	33	３月帰国。２４,２７９部の経典・典籍を請来。
1924 年 (大正 13 年)	34	東京帝国大学文学部嘱託としてチベット文献を整理。
1925 年 (大正 14 年)	35	東北帝国大学講師として講義のかたわらチベット仏典の目録作成。
1933 年 (昭和 8 年)	43	外務省後援の夏期大学の講師として旧満州、蒙古に出張。
1934 年 (昭和 9 年)	44	西蔵大蔵経(ちべっとだいぞうきょう)総目録を刊行。
1941 年 (昭和 16 年)	51	蒙古の徳王李守信(とくおうりしゅしん)の訪問をうける。
1942 年 (昭和 17 年)	52	東京大学、慶応義塾大学の講師。 慶応義塾大学外語研究所、アジア文化研究所の創設に参画。
1945 年 (昭和 20 年)	55	花巻町の光徳寺に疎開。
1947 年 (昭和 22 年)	57	円万寺観音堂本尊として、ダライ・ラマ 13 世恩賜の塑像の「千手千眼十一面観音像」を寄贈奉安。 境内に一燈庵が建てられ、光徳寺から移り住む。 太田村山口に疎開していた彫刻家の高村光太郎と親交を持つ。
1951 年 (昭和 26 年)	61	アメリカ合衆国のスタンフォード大学アジア文化研究所の招きにより観音山を去る。 光徳寺境内に蔵脩館(ぞうしゅうかん)が完成。観音山の経蔵から、チベット請来の仏典・仏具を移し保存する。
1953 年	63	西蔵撰述仏典(ちべっとせんじゅつぶってん)目録を刊行。アメリカ合衆国から帰国。

(昭和 28 年) 1955 年 (昭和 30 年)	65	日本学士院賞受賞。
1956 年 (昭和 31 年)	66	ロックフェラー財団の援助で東洋文庫にチベット学研究センターが設けられ同センターの主任研究員として後進の育成にあたる。
1966 年 (昭和 41 年)	76	勲三等旭日中綬章を叙勲される。
1967 年 (昭和 42 年)		2月 18 日逝去、西本願寺門主より智蔵院の院号の染筆(せんぴつ)下附される。法名、智蔵院釈等観法師。享年 78 歳。

キラリと輝く先人達

谷村貞治(やむらていじ)

○貞治子供のころ

貞治は、1896（明治 29）年、父定紀（のちに定衛）母たけの四男として、岩手県稗貫郡新堀村（現花巻市石鳥谷町）に生まれた。

明治 35 年６歳、新堀尋常小学校に入学し、３年生のころ石鳥谷の叔父隣次郎の養子となり、石鳥谷尋常高等小学校に転校した。　〔関栄一（宮沢賢治と盛岡中学校同年）らと友人となる〕

明治 43 年 14 歳高等科卒業後、医師を志し盛岡の李村医院に奉公。大正２年９月医術開業試験規則が廃止され、医師の道を絶たれたため、翌大正３年に初志を変更し逓信省職員を志願した。

しかし、大正４年 19 歳の春、逓信講習所入所試験を２年連続して失敗した貞治は、家出し夜汽車で上京。安宿で２泊し職を探したが、得られずに帰郷して出直すこととした。

晩秋に再度上京し逓信局見習い後、本採用となりました。

この後は、『岩手県版小学校道徳資料集「自分の生き方を見つめて」』より紹介する。

○青年時代から晩年へ　〔みちのくの電信王〕

モールス信号は、文章を、「ピッ」という短い音と、「ピー」という長い音の組み合わせで表した信号で送り、受け手が、それを耳で聞き取り文章に直すという電気通信（電信）の方法である。

７、８０年ほど前まで使われていた方法であるが、使いこなせる人の数は、とても少ないものでした。今の「メール」などのように、誰でも簡単に文章を作ったり送ったりすることなど、夢のような時代でした。しかし、岩手には、そんな「夢」を現実のものにしようと、新しい機械の開発に力をそそぎ、後に「みちのくの電信王」と呼ばれるようになった人物がいました。岩手県新堀村で生まれ育った谷村貞治その人である。

18 才の頃、東京に出た貞治は、「電信」を扱う役所で働き始めました。それから１年ほどたったある日のことである。貞治は、電信柱のてっぺんで、電線の修理をしていました。頭上には真っ青な空が広がっていた。そこにプロペラとエンジンの音をとどろかせながら１機の飛行機が飛んできました。

このころ飛行機は、まだまだめずらしいものでした。「すごいものが発明されたもんだ。」飛行機をながめながら、貞治は、自分でもおどろくほどの胸の高鳴りを感じ始めていました。

「よし。俺もこの電信の仕事で、人を驚かすようなものを必ず作ってやるぞ。」電線の修理もすっかり忘れ、小さくなっていく飛行機を見つめる貞治の胸の中には、いつの間にかそんな決心が固まって

きました。その後、貞治は、役所の仕事を続けながら、電気学校に入学し、電信開発に必要な知識をどんどん身に着け、開発への夢を膨らませていきました。

そんなおり、貞治の運命を左右する大変な出来事が起こりました。死者・行方不明者およそ 10 万人とも言われる関東大震災（1923 年・大正 12 年）である。東京一帯は、だれもが明日への希望を失ってしまうような有様でした。貞治も、地震が原因で発生した火災によって、住んでいた家など何もかも失ってしまいました。

ところが、貞治は、希望を失うどころか、この大震災をきっかけに新しい会社に移り、ずっと思い続けていた電信開発の夢に向かって新たな一歩を踏み出したのであった。

そこから、貞治の研究の日々が始まりました。そして、10 年近くに及ぶ研究の末、日本で初めてとなる「仮名文字電信機」を作ることに成功したのであった。

それまでは、たった一つの言葉を送るために、何種類ものモールス符号を打たなければならなかったが、この機械は、仮名文字のついたキーを押すだけで、自動的にモールス符号が送受信されるという、とても便利なものでした。

貞治は、東京蒲田というところに自分の工場を建て、その後も順調に仕事を進めていました。

しかし、更に大きな苦労が貞治を待ち受けていました。太平洋戦争である。東京も大空襲にあい、百万人以上の人が被害を受けました。大震災の苦労にも負けず、長い年月をかけて大きくしてきた貞治の工場も一瞬にして灰になってしまいました。残されたのは、たった一枚の看板と門の柱だけでした。

「あんなに頑張ってきたのにー。今回ばかりは、もう何もかもおしまいだ。」

大事に守ってきた工場を失い、これからの夢さえも見失った貞治は、仕事をやめる決心をしてふるさとの花巻に戻りました。

それからどの位経ったでしょう。ある日、貞治のもとに、国から意外な知らせが届きました。それは、「戦争で壊された全国の電信施設の機械を新しくして欲しい」という内容でした。これまでたくさんの苦労を乗り越え、努力を積み重ねて作り上げきた貞治の技術が国にも認められたのでした。

新たな決意を固めた貞治は、花巻に工場をかまえ、以前にもまして意欲的に仕事に取り組んでいきました。そして、施設の機械を新しくしただけではなく、世界初となる日本語も英語も打てる「テレタイプ電信機」や、「漢字テレプリンター」など、世の中の人々を驚かせるような機械も次々と開発していきました。

こうして貞治は、その一生を電信にささげました。

いくつもの困難を乗り越えてきた貞治。そんな貞治の心を支え続けてきたものは、ずっと昔、電信柱の上で見た真っ青な空を飛ぶ飛行機の姿と、その時に思い描いた大きな「夢」だったに違いない。

○新興製作所の技術遺産

新興製作所は、卓越した技術力により機械式通信機器分野において、国内のトップメーカーとして戦後復興期の情報通信を支えた。それらの機械が産業遺産として認定されている。

「機械遺産」（2008 年　認定機関／日本機械学会）＝機械式通信機械群（3 種類の機器）

「情報処理技術遺産」（2009 年　認定機関／情報処理学会）＝漢字テレプリンター

○花巻への貢献度

谷村貞治は、実業家でテレプリンターの開発、新聞報道の機械化の実現などにより、技術立国の礎を築き『みちのくの電信王』と呼ばれた。また、地元の産業振興の発展や谷村学院高等学校（現・花

巻東高等学校）を創立し教育分野でも貢献しました。

○谷村貞治　年表

西　暦	年齢	生い立ちと主な業績
1896 年 (明治 29 年)	0	3 月 19 日、岩手県稗貫郡新堀村（現花巻市石鳥谷町）に生まれる。
1902 年 (明治 35 年)	6	新堀尋常小学校入学。 3 年生のころ石鳥谷尋常高等小学校に転校。
1910 年 (明治 43 年)	14	石鳥谷尋常高等小学校卒業。 医師を志し盛岡の李村医院に奉公
1915 年 (大正 4 年)	19	逓信講習所入所試験を 2 年連続失敗し家出、上京。職を探したが、見つからず 5 日で帰郷。晩秋に再度上京し逓信局見習となり、後に本採用となる。
1916 年 (大正 5 年)	20	夜間部医学学校に入学するが、付いていけず断念し、神田電機学校（現・東京電機大学）入学。
1917 年 (大正 6 年)	21	神田電機学校も力不足で断念。神田正則英学校入学。
1918 年 (大正 7 年)	22	中央逓信局電気工夫から逓信局技手に昇進
1924 年 (大正 13 年)	28	英国サミエル商会電気機器部に引き抜かれる。
1926 年 (大正 15 年)	30	サミエル商会が逓信省と契約トラブルがあり、商会は目端貿易会社へ譲渡。 貞治も目端貿易会社に残る。
1937 年 (昭和 12 年)	41	退職独立。東京都蒲田区（現・東京都大田区蒲田）に旧陸海軍指定管理工場である新興製作所を設立。所長として電信機の開発・製造に携わり、逓信省からの要請を受け公衆電報用テープ式印刷電信機の研究に着手。
1945 年 (昭和 20 年)	49	本社工場を岩手県花巻に移転して GHQ から操業再開の許しを得て公衆用テープ式印刷電信機及び関連機器の開発、仮名文字印刷電信機の製造開始。
1950 年 (昭和 25 年)	54	世界初の和欧文三段シフト頁式印刷電信機を開発、テレプリンターの専門オペレーター養成のため工場隣接地に谷村学院を設立。
1954 年 (昭和 29 年)	58	功績を評価され第 7 回岩手日報文化賞（産業部門）を受賞。
1955 年 (昭和 30 年)	59	日本初の漢字テレプリンターを朝日新聞社と共同開発し新聞報道の機械化を実現。 発明考案の指導育成に尽力により発明協会の功労賞受賞
1957 年 (昭和 32 年)	61	電子計算機連動用のさん孔タイプライターを完成。 普通科女子高等学校の谷村学院高等学校を開校。 廃屋同然の状態だった盛岡劇場を谷村文化センターとして再建。
1958 年 (昭和 33 年)	62	印刷電信技術の貢献により紫綬褒章受章
1959 年	63	第 5 回参議院議員通常選挙に自由民主党（岩手選挙区）から立候補して初当

(昭和 34 年)		選。
1961 年 (昭和 36 年)	65	通信事業功労に対し第 10 回河北文化賞を受賞
1962 年 (昭和 37 年)	66	北斗飲料株式会社を設立（国内 11 番目のコカコーラボトラーとして誕生）
1965 年 (昭和 40 年)	69	第７回参議院議員通常選挙でも当選し参議院議員を２期務め，政調通信部副部長、東北地方開発審議会委員、裁判官訴追委員会委員などを歴任。
1966 年 (昭和 41 年)	70	勲二等瑞宝章を受章 北斗飲料株式会社をみちのくコカ・コーラボトリング株式会社に商号変更
1967 年 (昭和 42 年)	71	谷村電気精機株式会社を設立。
1968 年 (昭和 43 年)	72	４月 20 日　療養中の東北大学附属病院で亡くなる。正四位叙勲 「技術に国境はない」という名言を残している。

参考資料／　「石鳥谷町史」、「顕彰　谷村貞治」谷村貞治先生遺徳顕彰会発行、その他

キラリと輝く先人達

佐藤昌介（さとうしょうすけ）

1856 年、花巻城下に生まれる。札幌農学校（北海道大学の前身）の１期生としてクラークの薫陶（くんとう）を受け、農業経済学者として生涯を北海道大学と北海道の発展に尽くしたことから、「北海道の父」「北大の父」、「日本農業の父」と呼ばれる。

○佐藤昌介　年表

西　暦	年齢	生　い　立　ち　と　主　な　業　績
1856 年 (安政３年)	0	11 月 14 日、盛岡藩士昌蔵、キンの長男として花巻城下の川口町に生まれる。
1863 年 (文久３年)	7	母キン死去（文久 2 年との説もあり）、昌介は 13 歳まで母の実家で暮らす。
1868 年 (明治元年)	12	戊辰戦争。昌介御田屋小路の家に戻る。
1869 年 (明治２年)	13	父、目時隆之進（めときたかのしん）自害の責めで免官となり、昌介が家督を継ぐ。
1870 年 (明治３年)	14	一家で盛岡へ移住。藩校「作人館（さくじんかん）」で学び、原敬や田中館愛橘（たなかだてあいきつ）らを友とする。
1871 年 (明治４年)	15	上京、大学南校（なんこう）（のちの東京大学）に入学。（翌年家事により花巻に帰る。）
1874 年 (明治７年)	18	東京外国語学校（旧大学南校）に入学し、田中館愛橘、新渡戸稲造らと学ぶ。
1876 年 (明治９年)	20	クラークの誘いで、新設された札幌農学校に一期生として入学。

1877 年 (明治 10 年)	21	クラークの「イエスを信ずる者の誓約」に署名する。
1880 年 (明治 13 年)	24	札幌農学校卒業。 翌年、淡路島洲本(すもと)の城主・稲田邦植(いなだくにたね)の妹ヤウと結婚。
1882 年 (明治 15 年)	26	自費で渡米、牧場で無給見習い生として農牧業の実務を学ぶ。 翌年ジョンズ・ホプキンス大学に入学。
1885 年 (明治 18 年)	29	学術調査のためイギリス・ドイツに赴く。
1886 年 (明治 19 年)	30	ジョンズ・ホプキンス大学卒業。ドクトル・オブ・フィロソフィーの学位を得て帰郷。同年、札幌農学校教授となる。
1887 年 (明治 20 年)	33	アメリカで苦学中の新渡戸稲造らが、昌介の推薦により札幌農学校助教に任じられ、ドイツ留学を命じられる。
1894 年 (明治 27 年)	38	札幌農学校校長となる。（教授を兼務）
1899 年 (明治 32 年)	43	巌鷲(がんじゅ)協会（札幌岩手県人会）設立、初代会長となる。 新渡戸稲造らとともに日本初の農学博士となる。
1907 年 (明治 40 年)	51	東北帝国大学農科大学学長となる。（教授を兼務）
1913 年 (大正 2 年)	57	カーネギー財団の招きにより、第２回日米交換教授として渡米。（第 1 回は新渡戸稲造）
1918 年 (大正 7 年)	62	北海道帝国大学創設。初代総長となる。（同大農科大学長を兼任）
1924 年 (大正 13 年)	68	宮沢賢治が花巻農学校生徒を引率して北大を訪問。同郷のよしみもあって激励する。
1928 年 (昭和 3 年)	72	男爵の称号を受ける。
1930 年 (昭和 5 年)	74	北海道帝国大学総長を退任。
1933 年 (昭和 8 年)	77	新渡戸稲造死去、葬儀委員長となり葬儀を執り行う。
1939 年 (昭和 14 年)		病床の中で妹婿の菊池捍(まもる)に漢詩を贈る。在京の旧友に「我将に世を去らんとする感慨深し」と電文をしたためる。6 月 5 日、札幌で永眠。享年 84 歳。

島善鄰(しまよしちか)

1889 年に花巻の武士の家系に生まれ、北海道大学で花巻出身の学長佐藤昌介の薫陶を受ける。のちに、荒廃し危機的状況にあった青森のリンゴを救うため研究を重ね、「リンゴ博士」「リンゴの神様」と呼ばれた。北海道大学第 6 代学長も務めている。

○島善鄰　年表

西　暦	年齢	生　い　立　ち　と　主　な　業　績
1889 年 (明治 22 年)	0	8 月 27 日、花巻城に勤める武士であった島家に、父時中、母きちの五男として生まれる（生地は広島）
1896 年 (明治 29 年)	7	東京府立赤坂尋常小学校入学（2 年終了の修業証書現存）。
1897 年 (明治 30 年)	8	父時中死去。
1899 年 (明治 32 年)	10	高木尋常小学校（矢沢尋常小学校の前身）通学。
1903 年 (明治 36 年)	14	矢沢高等小学校 4 年卒業。
1904 年 (明治 37 年)	15	盛岡農学校入学。
1907 年 (明治 40 年)	18	宮城県立仙台第一中学校 5 年入学。
1908 年 (明治 41 年)	19	東北帝国大学農科大学予科入学。
1911 年 (明治 44 年)	22	東北帝国大学農科大学農学科（のちの北海道帝国大学）第 1 部入学。学長の佐藤昌介や新渡戸稲造の薫陶を受ける。
1914 年 (大正 3 年)	25	東北帝国大学農科大学農学科第 1 部卒業。東北帝国大学農科大学助手。
1916 年 (大正 5 年)	27	青森県農事試験場からの強い要請で、主任技師として赴任。 病害虫、土壌、品種など多岐に渡るリンゴ研究の始まりとなる。
1918 年 (大正 7 年)	29	花巻町の豪商で貴族院議員の瀬川弥右衛門氏次女浦子と結婚。
1922 年 (大正 11 年)	33	欧米６ヶ国へ出張。
1923 年 (大正 12 年)	34	帰国。アメリカからゴールデン・デリシャスを持ち帰る。 （のちに改良されてふじやつがるとなり、全国に普及する。）
1926 年 (大正 15 年)	37	満州上海方面へ出張。
1927 年 (昭和 2 年)	38	帰国。北海道帝国大学助教授。
1936 年 (昭和 11 年)	47	論文「リンゴモニリア病に関する研究」で農学博士となる。陸軍特別大演習で北海道巡幸の昭和天皇にリンゴモニリア病についてご説明する。
1939 年 (昭和 14 年)	50	北海道帝国大学教授となる。
1945 年 (昭和 20 年)	56	北海道帝国大学農学部長となる。

1948 年 (昭和 23 年)	59	北海道農業試験場長となる。
1950 年 (昭和 25 年)	61	弘前大学文理学部教授兼任。北海道大学学長となる。 昭和９年に退任するまで、各種の委員会委員を務める。また岩鷲協会第２代会長として佐藤昌介の跡を継ぎ、学生から「島おやじ」と親しまれた。
1954 年 (昭和 29 年)	65	北海道大学学長退任。弘前大学教授。
1956 年 (昭和 31 年)	67	北海道公安委員長となる。 紫綬褒章受章。
1958 年 (昭和 33 年)	69	弘前大学教授退任。
1960 年 (昭和 35 年)	71	国際農友会会長として訪米。
1964 年 (昭和 39 年)		８月９日札幌市の自宅で心筋梗塞のため逝去。享年 75 歳。正三位勲一等瑞宝章を受章。墓所は花巻市坂本町の瑞興寺。 「自彊不息(じきょうふそく)」（自ら勉め励んで、一刻も休まないこと）を座右の銘とした。

淵澤能恵(ふちざわのえ)

1850 年、現在の石鳥谷町で南部北家家臣の家に生まれ、アメリカ留学を経て女学校の教師を歴任。56 歳(数え年)で韓国を視察した時に女性の実情に触れ、その後亡くなるまでの 30 年間を韓国の女子教育に捧げた。

〇淵澤能恵　年表

西　暦	年齢	生　い　立　ち　と　主　な　業　績
1850 年 (嘉永３年)	0	５月８日、花巻市石鳥谷町関口、南部北家家臣淵沢武市(ぶいち)・ツヤの次女として生まれる。
1851 年 (嘉永４年)	1	２月、東和町旧土澤の武家濱田新次郎・カルの養女となる。後に養父死亡。
1873 年 (明治６年)	23	兄を頼り釜石に行き、パーセル家のメイドとなる。
1879 年 (明治 12 年)	29	パーセル家帰国に従い渡米。ロサンゼルス市に滞在。のち、サンフランシスコに移住。キリスト教の洗礼を受ける。
1882 年 (明治 15 年)	32	帰国、京都同志社女学校に入学。生徒仲間では母親のような存在として評判が高く、徳望家と評されていた。
1885 年 (明治 18 年)	35	同校中途退学。 同年９月、東京東洋英和女学校で教鞭をとる。のち、一橋高等女学校学監。下関洗心女学校・福岡英和女学校等で教育にあたる。
1904 年 (明治 37 年)	54	この頃　養母死亡により復籍。

1905 年 (明治 38 年)	55	5 月、貴族院議員の岡部長職(おかべながもと)夫人の誘いに従い、韓国視察に参加。韓国女性の実態を目の当たりにする。
1906 年 (明治 39 年)	56	日朝婦人会を組織、総務となる。 同年 5 月、明新淑明女学校創立。校長に名門の李貞淑を迎え、自ら学監となる。「身を以て子弟に及ぼす感化」を教育方針とした。
1912 年 (明治 45 年)	62	1 月 13 日、第２代理事長に就任。この時女学校は財団法人淑明学院となっており、能恵は昭和 11 年没するまで勤める。
1915 年 (大正 4 年)	65	9 月、勲六等宝冠章を賜る。従七位に叙される。
1927 年 (昭和 2 年)	77	東亜日報社教育功労賞受賞、その他種々受賞する。
1936 年 (昭和 11 年)		2 月 8 日、永眠。学校葬が営まれ、京城府弘済墓地に埋葬。享年 87 歳。 その後、紫波町本誓寺、東京多磨墓地、土沢の濱田家の浄光寺や生家の菩提寺などにも分骨埋葬されているという。なお、淑明女学校は現在淑明女子大学となり現存している。 また、文献は大正十年石鳥谷町旧八重畑村誌に初めて紹介され、その後多くの著書に掲載されている。

協力(敬称略)

(一財)花巻高村光太郎記念会
㈱エーデルワイン
南部杜氏伝承館
花巻市観光課
花巻市文化財課
花巻市博物館
花巻新渡戸記念館
宮沢賢治記念館
萬鉄五郎記念美術館
花巻おもてなし観光ガイドの会

＝ あ と が き ＝

どっどど どどうど どどうど どどう

青いくるみも吹きとばせ　すっぱいかりんも吹きとばせ　『あいつは風の又三郎だぞ。』

「はなまき通検定」の参考書として編集したこの往来物（テキスト）は、皆さんの花巻の知識度を高めることと検定意欲の盛り上げに役立ったでしょうか？

既刊のテキストに新たに追加した内容もあるが、十分なものであるならば幸せである。

この往来物を基に検定問題作成班は新鮮な問題や難問（？）作成に向かっていく。

皆さんは、ジブンヲカンジョウニ入レズニ　ヨクミキキシワカリ

どっどど　どどうどと解答して欲しい。

・・・